

幸田露伴に夢中になっていた時期があった。そのとっかかりは何だったのだろうと考えてみるが思い出せない。やはり俳句絡みだったのではないかと思う。世に俳書は五万とあるだろうが、ほぼ学者や専門俳人のものだろうし、現代の我々が読むのは、遡っても子規や虚子あたりからであろう。また、子規の系譜には俳句もよくした夏目漱石がいるが、俳話、俳論というようなものがあるのか寡聞にして知らない。ちなみに露伴と漱石は同じ一八六七年の生まれ。同年生まれとは思えない文体、言葉遣いに隔たりがある。文章のことだけで言えば、漱石が難しいということはないだろう。

最初に手にしたのは「芭蕉入門」新潮文庫で、内容は「俳諧に於ける小説味戯曲味」「芭蕉翁七部概観」「芭蕉と西行・杜子美・黄庭堅」「芭蕉俳句研究」「続芭蕉俳句研究」「続々芭蕉俳句研究」。びっしりとルビと意味が書き込んであるので、確かに読んだのだろうがいささか心もとない。しかし、芭蕉の底流にあるものということで「芭蕉と西行・杜子美・黄庭堅」の章には感動した記憶がある。「詩的良心、芸術的良心を欺かない」云々の言葉が刺激的だった。

いずれにしても、言葉遣いにふなれなのと、当方に知識がなさ過ぎるのとで読破は難行苦行。それなのにますます昂じて、古書を買って（今は積ん読）、友人たちと輪読会なるものまで開くようになってしまった。「明治の文豪を読む」と題したその会に俳人はいないので、やむなく小説や随筆が中心となったが、一人で読むよりははるかに効率的だった。「連環記」では全員卒倒しそうだったが。

そんな中、高木卓著「露伴の俳話」講談社文庫という本が目にとまった。早速読み始めると、これが抱腹絶倒の面白さなのだ。著者の高木卓は、露伴の妹のバイオリニスト安藤幸の息子で露伴の甥に当たる。露伴邸で子どもや孫、甥など十数人を集めて開いた句会での話を記録したものである。全員初心者なので一から手とり足とり。語り口はべらんめえ調。参加者の拙い句を、辛抱強く励ましつつ、俳諧の始まりから、発句の要諦などを惜しみなく語っている。

まず「格を備えていなければならない」「初心者は初めは写実から」「切れ字について」「才気を弄するのがよくない」「実相違背」はだめ「詩歌は理るのでなく調べるもの」「初一念(最初の考え)はわりあいいいものだ」「姿先情後、句の姿」「句は鍛錬しなきゃあいけねえ」「句は、はっきりしたのもよし、幽玄なものもいいが、歩いて、動いて、ためて見る、そういう工夫と鍛錬が必要」「句は〈こころ〉がだいじで、人情の句、自然の句、両者のまざった句と分けられても、人情ならまことが、自然ならば景色のいいのが、何よりも詩歌のこころに沿う」等々、まるで露伴が生きてそこにいるような錯覚にとられる。読ませる高木の筆力もすごいが、内容は現代でもためになる話ばかりである。

結局、この会は丸二年続いたとあった。我が輪読会はコロナで休会中。